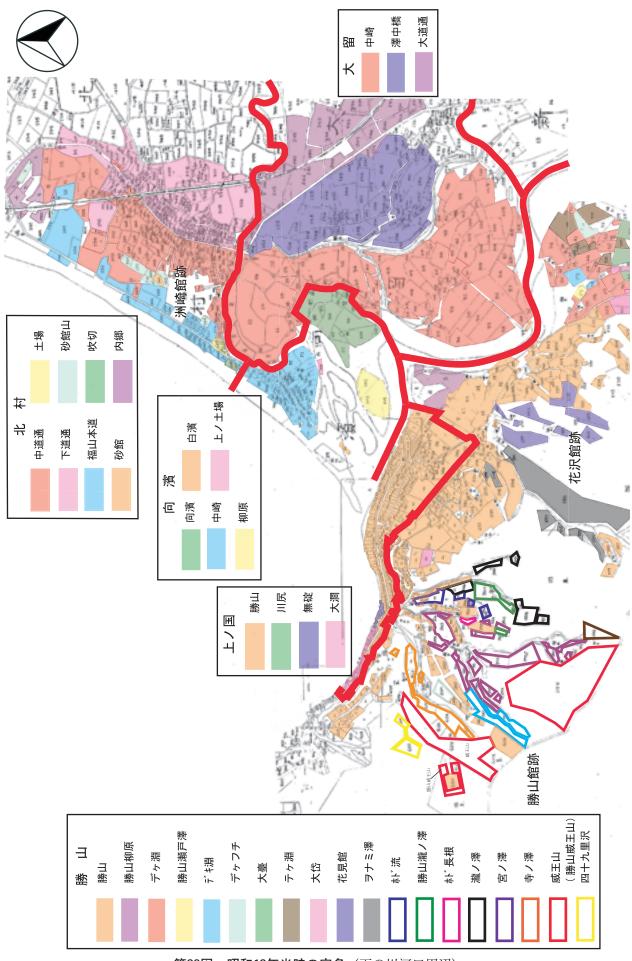


第22図 正保日本図(蝦夷地部分図) 江戸初期~中期 (高木崇世芝『北海道の古地図』より転載)



第23図 昭和10年当時の字名 (天の川河口周辺)

「ツガ」がアイヌ語系の地名である可能性は十分考えられる。「テガ」や「ツガ」に音韻的にもっとも近いアイヌ語は「to-kaト・カ」で、山田秀三氏によれば、「沼(の)・上手〔又は「ほとり」「岸」〕の意となる $^{(51)}$ 。

いまではすっかり陸化してしまったが、天ノ川河口部に水を湛えた潟湖(ラグーン)が存在し、潟湖の上手、いまの砂館神社が建つ北岸一帯が「天河 to-ka ト・カ」と呼ばれていた可能性はきわめて高いと考えられる。

傍証となりうる古文書に年紀が天保10年(1839)亥12月の「御書上 上ノ国」(『全能登屋笹浪家文書』) (巻末「資料編」参照)がある。上ノ国村名主の久末鉄五郎が年寄とともに、在方御掛中に差し出した書付で、上ノ国と北村の境界付近で起こった難破船や寄物などに関する先例を書き上げたものである。

上ノ国の名主たちが表敬のため上様を送迎した場所は「中道通毘沙門堂下」である。毘沙門堂は現在の砂館神社のことであるので、「毘沙門堂下」とは、江戸時代の福山街道(現在の町道向浜線)の路上を指している。

時代が若干ずれるが、寄鯨は「上之国字大川湊脇北之方」と「上之国持毘沙門堂下」に漂着し、破船は「毘沙門下」でも起こっているので、砂館神社前に水域を想定できそうである。また、「川向字大淵折掛下」など湖内の地形を彷彿とさせる地名も記されているので、天保の頃、船幅7~8尺の「中遣舩二人乗」が碇泊できるほどの川湊(船溜まりや船着き場)があったと考えてよさそうである。

2) 潟湖(ラグーン)の盛衰-自然地理学的調査-

天の川の河口部に洲崎館跡の前面まで水を湛える潟湖(ラグーン)が存在し、中世には川湊が形成されていたとは以前から想定されていたことであるが、館の時代の地形環境や景観を復原するに資料が乏しかったため、自然地理学的な調査を行った(詳細は巻末「資料編」の『上ノ国町洲崎館跡周辺の地形調査』参照)。

その調査によれば、天の川の河口付近は約6000年前の縄文時代前期に地球温暖化によって海水面が上昇し(縄文海進)、それによって海域が内陸に入り込み、大きな内湾が形成された。海面の急上昇が収まってやや停滞すると、砂洲が内湾と日本海を隔てるように延び、北から南に向かう沿岸流の漂砂によって砂丘が砂洲を被覆しながら細長く南西に発達、その内側に潟湖が形成されたものと推定されている。

その後、ラグーンは河川の運搬する土砂が形成したデルタによって埋積が進んで縮小し、また北西の卓越風によって砂丘から飛砂の供給も受けて陸化が進んだが、洲崎館跡の南岸から向浜の砂丘の内側に目名川の流路が残り、その流路沿いに擦文時代や中世の川湊が形成されたと考えられている。

日下雅義氏によれば、日本海沿岸をはじめ各地の砂質海岸に数多くみられたラグーンは、縄文時代の終わり頃から奈良時代にかけて、もっともラグーンらしいラグーンがみうけられ、弥生時代から古墳時代にかけてはラグーンの壮年期、渤海の使節が盛んに来着した8、9世紀頃には若干老化していたという (52)。10世紀の擦文後期以降、日本海に潮口を開けたラグーンには、流入する河川の埋積作用によって幾つもの中洲が生まれ、クリークが走る景観が広がっていたが、しだいに水域は縮退し、目名川の流路を残して陸化していったのであろう。

当地方のように潮差が30~50センチほどしかないラグーンは避難港としての性格が強いと日下氏は指摘する。好天時の潮差はさほど大きくないが、いったん荒天になると外海からの波浪や暴風などで、辺り一面、鯨が流れ寄るような大きな水域に変貌し、避難碇泊中の中遣船なども破船の憂き目に遭ったのであろう。

3 勝山館跡

1)海辺に臨む絶壁下の上ノ国

勝山館跡周辺の地形環境や景観復原のための環境地理学的な調査は行われていないので館跡直下の上 ノ国市街地の地形環境や景観を松浦武四郎の日誌類や発掘調査の成果等を突き合わせながら、以下に素 描してみることにする。 扨是よりまた岩角峨々たる九折を凡三四丁も下りて大澗浜と云え下る。此処に下るや岩磯峨々としたる間に細道有。・・・船小屋多し。岩角道行ことしばしにして村二着るなり。・・・

此村次に図する如く一岬の北面にして、村の上絶壁、村の下直に海岸にして暗礁多く、 北向きにしてヱサシカモメ島と対す。船懸り澗よろし。然し西北の風には至て不宜。

東南の風にはよろしき湊也。又川口は砂底なれども余は皆小石にして碇がゝりも宜し。 人家弐百軒計。漁者にして小商人并商人、船持、旅籠屋等も有、美々敷一筋市也。

(『校訂 蝦夷日誌』二編)

武四郎が「村の上絶壁」としたのは、大澗ノ崎から寺の沢・宮の沢両沢まで続く標高35m超の段丘崖と、天の川下流域左岸に沿って発達しながら市街地後方に迫り出す台地崖を指していると考えられる。いずれの急崖も海岸近くに迫り、可住地は一筋の通りを挟んで海沿いの低位段丘の上に細長く延びていたと推される。

宮の沢川の河口付近、伝大蔵屋敷(大蔵法印秀海の旧居)跡付近に旧字名「無碇」が残っているが、地元の故老は「むいかり」とは言わず、「みょうがり」と呼ぶ。武四郎は、「医王山と云をこへて、また九折桟道様の処を下りて、坂下え下る。此処を俗に碇いらずと云也。よき船澗なれば如此号るべしと思ふ。」(『竹四郎廻浦日記』)と書いているので。幕末にはまた「碇いらず」と呼ばれていたことが分かる。江戸時代、上ノ国から原歌を経て、大安在の浜へと越えていく「福山本道」とは別に、直に夷王山(医王山)を越えて寅の沢へ抜ける間道(平成8年「歴史の道百選」指定の「福山街道」)があった。「無碇」はちょうど本道と間道の分岐にあたる。

『蝦夷巡覧筆記』(寛政9年(1797))や『松前西東在郷並蝦夷地所附』(享保12年(1727))などの古文献に描かれた地名について現地比定を行っていくと、旧名「無碇」は「モヨカリ」、「もよ狩」と呼ばれていたことが分かる。「モヨカリ(もよ狩)」(アイヌ語で moy-tukari モィ・トゥカリ 入江・の手前)が漢字で表記される過程で、「船懸り澗よろし」、「よき船澗」という錨地の意識が入り込み、「無碇」という漢字二字を招き寄せ、その後、大澗湾全体の呼称に変わっていったものと考えられる。

「無碇」から海岸沿いに北西に向かって細道を辿り、海岸部に突き出た「岩角」(古くは「ワシリ」、「オッキイヤマ」とも呼んだ。昭和35年頃の国道工事で消滅)の裾部を越えると、上ノ国漁港が築設された船間「大澗」である。武四郎は大澗のことを「弁才等多く此処へ懸る」(『渡島日誌』)と書いた。

天の川河口部左岸から大澗ノ崎までの海岸地形は、河口部付近の海は遠浅で、海底に無数の岩石が存在するが、「大澗」よりに水深はしだいに深くなる。天の川河口の砂地から続く玉礫の浜が、「無碇」の辺りで岩礁地帯に変わり、「大澗」の手前まで岩礁が拡がるような地形であったと推測される。

2)砂州上の川尻地区と後背の内潟

天の川河口部左岸、市街地中央部から川尻地区の地形環境であるが、河口部の南縁は現在よりも北に 突き出ており、潮口はまだ北に開いていた。その後、天の川は平野部の南西縁にしだいに移動していき、 河口南縁の突出部を浸蝕、波浪が陸地を削っていったようである。

川尻地区は、町指定有形文化財の清浄寺本堂と上ノ国勝山簡易郵便局を結んだラインのあたりからしだいに低くなっていくが、町道上ノ国北村線の北側は、山神社跡地の近く、上ノ国観音堂付近まで砂層がよく発達し、川沿いに砂州が形成されていたようだ。この上流に向かって延びる河中の砂州には現代まで人為的な痕跡がない。

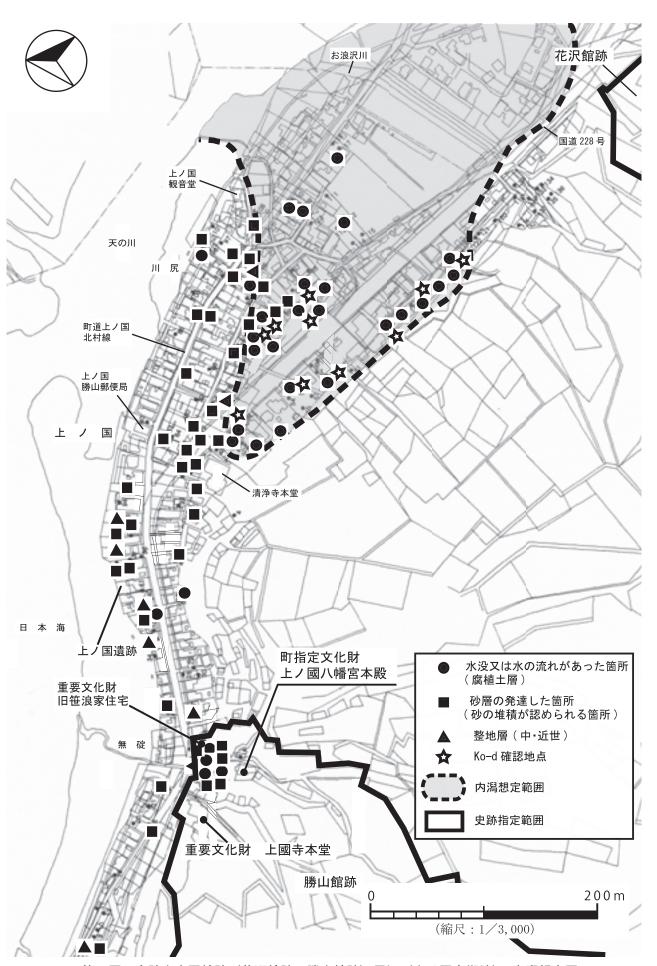
砂州の後背地は、上ノ国市街地遺跡の調査結果から、腐食が発達せず白色や黄褐色の粘土層が堆積した水底もしくは沼地と推測される地点と、腐食が発達した低湿地もしくは沼地と推される地点に色分けすることができる。

それらの地点をなぞると、清浄寺の東側、旅館よし栄の駐車場付近まで天の川の流水が入り込んでおり、お浪沢川や、上ノ国観音堂の東側を流下する無名川などの流入もあって、一帯は内潟のようになっていた(第24図参照)。この内潟の存在は、すでに市村氏が推定しているところである (53)が、アイヌ語で onne-moy オンネ・モィ〈オナミ 昔からの・淵(入江)と呼ばれていたかと推される。

砂洲の東端を越えても、黄褐色の粘土層が発達し、水底であったと考えられているので、天の川が湾入していた水域の川上への拡がりは河中に突出した花沢館の西側、お浪沢川付近までも延びるかと推測される

砂州の内側で Ko-d 火山灰層の堆積が確認できた地点は当時ほぼ静水状態であったと考えられ、Ko-d 火山灰降下後に乾燥状態になっているので、沼沢や低湿地の状態であったのは近世前半までと推測される。

地籍図を見ると、上ノ国観音堂付近まで、両側をきれいに地割りしながら東に走ってきた町道上ノ国 北村線が急に屈曲して川端へ続き、そこに無名川が注ぎ込んでいるという地形が確認できる。上ノ国漁 港の防波堤ができるまで、潮の遡行限界は、お浪沢川の河口を越えていくほどであったので、砂州が途 切れる辺りの観音堂付近に古い時代の船着き場を想定し、潮汐差を利用した船の出入が考えられる。



第24図 史跡上之国館跡(花沢館跡・勝山館跡)周辺(上ノ国市街地) 内潟想定図